

片上義春氏

織鶴タオル有限公司 代表

今治でひときわ個性を放つタオル職人が、今回とり上げる片上義春氏である。2021年で織鶴タオル創業45年。ひとつの節目を迎えるが、タオルづくりは片上氏の代で廃業する。日本のタオル製造において、惜しい職人をひとり失う。

織鶴タオルのタオルは、シックでありながら印象に残るデザインであり、創業時から変わらず豊田式自動織機で製織される生地は、どれも高度な技術を要するものばかり。生地の素材は綿や麻など天然素材にこだわり、近年では染色も草木染めにこだわっている。現在は大量生産体制のもとで薄利多売が先行する時代だが、職人の技は少量生産でこそ生かされる。片上氏は、職人ゆえの確固たる信念を持ち、そう簡単にはその信念を曲げない。そこが、片上氏の強みである。



片上義春氏



かたかみ・よしはる ☆ 1944年2月、越智郡大西町（現・今治市大西町）生まれ。小西村立小西小学校（現・今治市立大西小学校）、大西町立大西中学校（現・今治市立大西中学校）を卒業したのち、1959年4月に愛媛県立今治工業高等学校紡織科に入学。同校を卒業後、1962年4月に広洋タオルに入社。1975年に独立し、織鶴タオル有限公司を設立。タオル用自動織機を使ってさまざまな生地を製織し、シェル織物で特許を取得。その他各種受賞歴あり。2004年に織鶴タオルのモノづくりがNHKの番組でとり上げられ、着目される。

1. 幼・少年時代

恩師との出会い

片上義春氏は、1944年2月28日に父親の寅市氏と母親のミヨノ氏との間に6兄弟の5男として越智郡大西町（現・今治市大西町）に生まれた。1950年4月、地元の小西村立小西小学校（現・今治市立大西小学校）に入学し、小学校時代は友だちと池で釣りをしたり、川で泳いだりしてよく遊んだ。その後、1956年4月に大西町立大西中学校（現・今治市立大西中学校）に入学し、中学校時代はスポーツに打ち込んだ。部活動は卓球部に所属したが、人数が足りないとなるとサッカー部やバレー部にも助っ人で参加し、練習や試合に駆り出された。やはり一番面白かったのは卓球だったが、中学時代に球技を中心にいろいろなスポーツを経験した。

中学校までは遊びや部活動に熱中した片上氏だったが、将来のことを見据えて1959年4月に愛媛県立今治工業高等学校紡織科に入学した。越智郡を含めた今治市周辺の地域は戦前からタオルを生産する綿織物の産地であったが、1945年の今治空襲で多くの工場や織機を失い、ほぼゼロからのスタートを余儀なくされた。しかし、片上氏が高校に入学する頃には戦後復興をすでに果たし、タオル製造が軌道に乗り出した時期である。片上氏のような若者にとってタオル業界は、将来性のある魅力的な産業に映った。また、片上氏の母親の実弟・檜垣一夫氏が檜垣タオル工業（株）を経営しており、幼少の頃からタオルづくりを身近に感じていたことも紡織科に入学した理由である。

紡織科では、3年間、タオルをはじめとする織物の製織技術の基礎を学んだ。人生において最初の印象深い出会いは、紡織科で指導を受けた池内敬一郎先生との出会いであった。池内先生は、たいへん面倒見のいい指導者で、片上氏に大学への進学を強く勧めた。当

の池内先生は、途中で大学への進学が決まり紡織科の教員を辞めてしまっただが、自らの夢を教え子の片上氏にも共有して欲しかったのかもしれない。片上氏と池内先生との付き合いは池内先生が亡くなるまでつづき、いい指導者に出会って織物の技術を学べたことが、その後の片上氏のタオル人生において大きな意味を持った。

スポーツが好きな片上氏は、紡織科に在籍している頃も中学校から始めた卓球をつづけた。授業の合間をぬって友人と卓球に興じ、織物製造の技術を学ぶ傍ら、スポーツも楽しんだ。

池内先生の薫陶を受けた片上氏は、大学進学の間ではなく助手として紡織科に残る予定だったが、卒業寸前になって学校の都合で予定が変更され、タオルメーカーに急きょ就職することになった。どのような選択をするにしろ、紡織科で過ごした3年間は片上氏にとってタオル業界に入る重要な準備期間となり、池内先生と池内先生から学んだことは一生の宝物となった。



今も優秀な人材を育成している愛媛県立今治工業高等学校

（写真出典：愛媛県立今治工業高等学校 HP より引用）

2. 広洋タオルに入社

豊田織機から指導に来ていた技術者から多くのことを学ぶ

片上氏は、1962年3月に愛媛県立今治工業高等学校紡織科を卒業し、タオル工場を運営していた叔父の紹介で、同年4月に広洋タオル（株）（1996年廃業）に入社した。スヌーピーなどの人気キャラクターのタオル製品をつくっていた広洋タオルは、今治で初めて工場に冷暖房設備を完備したり、最新の豊田式自動織機を32台設置したり、豊田織機と共同で新しいパイル装置を開発したりするなど、かつては今治のタオルメーカーを牽引する大手のタオルメーカーであった。

当時はどこのタオル工場も時給制で、従業員は朝早くから夕方遅くまで工場で働いた。片上氏の場合、入社当初は時給400円で朝の7時30分から夕方6時まで働き、月当たりに換算すると50,000円ほど稼いでいた。厚生労働省の「賃金構造基本統計調査」によると、月給の調査が開始された1958年のサラリーマンの平均月給は16,608円であり、この数値に比べると高い収入を得ていた。

片上氏は広洋タオルで約4年間、製織技術者として研鑽を積んでいくわけだが、4年というけっして長い期間ではなかったが、ここでの経験が大きな財産となった。まず、広洋タオルの社長・秋山幸雄氏の存在は大きかった。秋山氏は、社内の技術者に対してチャレンジ精神を養いスキルアップに繋がるような機会を頻繁に提供した。たとえば、大阪市中之島にあった大阪国際貿易センター（現・グランキューブ大阪）に時間ができれば見学に行かせたり、各技術者の自由な発想を生かしてタオルを製織させたりした。

大阪国際貿易センターでは数々の展示品を目の当たりにしたが、片上氏がもっとも衝撃を受けたのはイタリア製の織機だった。今まで見たことのない形状をしており、想像力を掻き立てられた。そして、もっとも印象深かったのは、当時日本ではトップクラスの織機

で製織された（株）川島織物 （現・川島織物セルコン）のもじり織りの緞帳であった。

駆け出しの新人だった片上氏は、展示会に出かけてただ展示品を見ているだけであったが、こうした時間と経験はのちにたいへん役に立った。なぜなら、40年後、このとき見たもじり織りをパイル装置で再現し、パイルが抜けないタオルを製品化できたからである。

「40年くらい経ってからつくってみたら理論的には合ってたんですね。ほやけど、技術的にはものすごい難しかったですね」と片上氏は当時のことを振り返る。



片上氏がパイル装置で作成したもじり織り「シュールド織」の生地

パイル装置は、かつて名古屋市にあった機料店に依頼してわざわざ今治まで来てもらい、豊田式自動織機に取り付けてもらった。若かりし片上氏が大阪国際貿易センターで見たもじり織りは、40年越しで片上氏の手によってタオル織機で再現された。片上氏の鋭敏な感性と技術の賜物である。

広洋タオルでの貴重な経験はもうひとつある。広洋タオルが新しく豊田式自動織機を導入して以来、タオル工場に（株）豊田織機の本社から派遣された技術者がときどき指導に訪れており、片上氏をはじめ広洋タオルの技術者は、豊田式自動織機の使い方の指導を受

けるなかで多くのことを教わった。これも片上氏にとって貴重な経験となった。教わった内容のうち、片上氏が「さすが豊田織機の技術者は違うなあ」と感心したのは、製織技術者の重要な役目のひとつである織機のメンテナンスに対する考え方だった。

織機は壊れたら修理するものというのがそれまでの常識だったが、壊れないようにメンテナンス（保全）する方がより重要であることを教わった。目から鱗だった。「どうやって壊れる前に直すんぞ」と最初はその意味がわからなかった片上氏であるが、指導を受けるうちにその重要性が十分に理解できた。上手にメンテナンスすることで織機は長持ちし、効率が数段上がったからである。たとえば、自動織機のシャトルルーム部品として使用する「ピッカー」は1～2年で磨耗してしまいが、ピッカーが壊れる前に交換してあげると織機の保全が効率よくでき、しかも織機を長く使いつづけることができる。

こうして、広洋タオルでの4年間は、片上氏にとって次に繋がる貴重なものとなった。工場でひたすらタオルを製織するのではなく、編み物にもチャレンジする機会をもらったり、見聞を広げるために展示会に行かせてもらったり、広洋タオルの秋山氏には感謝している。「おそらく広洋タオルに入らなかつたら、モノづくりはできてないとおもいます」と片上氏は言う。

プライベートでは、27歳のときに玉川町出身のミユキ氏と結婚し、一女一男の二人の子供に恵まれた。ミユキ氏は、タオルづくりには携わっていないが、片上氏の仕事を側で見守りつづけてきた。ミユキ氏は「あんた不器用やね」と片上氏によく言うらしいが、だからこそ、片上氏は納得するまで考え抜いてタオルづくりをしてきた。片上氏を支える、静かだが力強い言葉である。（次号につづく）

